愛と憎しみの宴

上巻

阿木慎一郎

阿木慎一郎●愛と憎しみの宴

昭和51年7月15日　発行
定価　九八〇円

著者　阿木慎一郎

発行者　藤山真人

発行所　株式会社　東邦出版社
東京都新宿区西早稲田三―三
電話東京(二〇二)七六三一～三
振替東京八五二七五

装幀　木寺啓幸

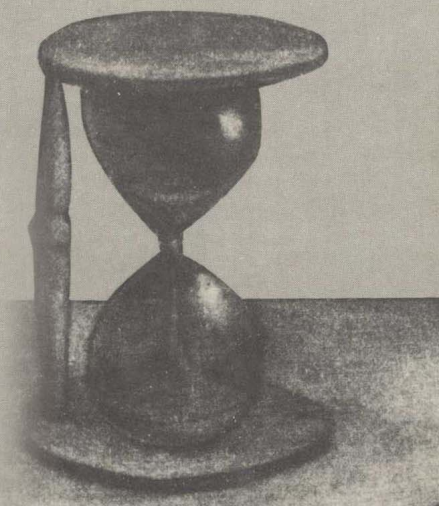
印刷・日大印刷　製本・東京美術紙工

愛と憎しみの宴

上巻

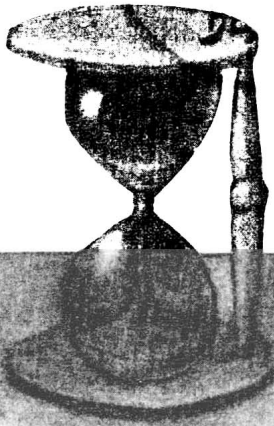
阿木慎一郎

東邦出版社



愛と憎しみの宴 上巻

阿木慎一郎



www.kanunbook.com

愛と憎しみの宴（上）

第一章

1

天気予報は当たらなかった。前日、気象庁は、朝から関東地方は雨になるだろうと予報していたが、皮肉なことに空はぬけるような青さだった。

九月は一年のうちでもっとも雨の多い月であるが、今年は九月に入ってからの雨はわずかに一日だけで、今日のような晴天が二週間あまりもつづいていた。人によっては、そろそろ一雨欲しいと感じる頃だが、この日、田村家の前で主を待つ運転手の場合は異なった。彼はむしろ当たらぬ予報を喜んでいた。雨の日はどうしても車が汚れる。外まわりもそうだが、とくに車内の汚れがひどく、ふだんの倍も清掃に時間がかかるのだ。しかも彼にとってこの日はふつうの日ではなかった。この日は彼の勤め先の大河内建設の創立記念日で、たまたま今年はその四十五周年目に当たり、恒例の記念パーティが夜の六時から日比谷の帝都ホテルで催される。

彼ら大河内建設の車輌部の者は、五年に一度まわってくるこの記念日には、夜半まで働かされることを覚悟しなければならなかった。

ただ、彼の場合はまだ他の同僚よりよかった。それは彼が田村常務専任の運転手だったからである。今日のような日に他の重役たちはきまってパーティの後、二次会、三次会と会社の車を使って動きまわる。だが彼が仕えている田村常務が夜遊びをすることはめったにない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今夜も田村常務夫妻はきっとまっすぐ帰宅するはずで、よほどのことがない限り、他の同僚たちよりはずっと早く勤務から解放されるに違いない。運転手は腕時計を見て時刻を確かめると、それまで読んでいた新聞をたたんでグローブボックスにしまい、車のシートから腰を上げた。

田村常務が時間に遅れることはまずない。今日もこの重役は、運転手が予測した時刻ぴったりに、玄関口から姿を見せた。

運転手はすでにドアを開けて主人のくるのを待っていたが、次の瞬間、玉砂利を踏んで近づく常務の後に夫人の姿を見つけて、オヤ、という表情になった。

田村家の女主人が夫を見送って門前にまで出てくることはめったにない。そして運転手は十三年間も勤めたお蔭で、その女性が単なる重役夫人でないこともよく知っていた。彼女は田村常務の妻であると同時に、前社長のただ一人の娘であり大河内建設の大株主でもあるのだった。

そんな理由もあってこれまで運転手が、夫を見送りにこない夫人を不思議に思うことはなかった。その田村美紗子という女が夫を見送らぬのは、彼女自身が田村常務以上の地位にある人間だからなのだ、と彼はいつの間にか、そのように納得してしまっていた。

「おはよう、ご苦労さん」

いつものとおり田村常務はそう運転手に声をかけると、後につづく女中の手から鞄を受取り、開いたドアに近よった。運転手は一礼して、

「おはようございます」

と常務よりむしろ夫人に対して丁重に挨拶したが、田村夫人はそんな彼の態度を無視し、車に近づくときびしい目でフロントグリルを見つめた。

「どうしたのだね？」

夫人のようすに気づいた常務がそう声をかけると、
「車の型を調べているのですよ」
と常務の妻は車から目をはなさぬままで答えた。運転手は、自分の知らぬ間に傷でもつけられたのかと、あわててフロントにまわって車を調べたが、どこといって異常は見当たらなかった。運転手が不審げに夫人を振返るのを待って、常務の妻は彼に訊ねた。
「今夜のパーティのことですけど、あなたが私を迎えにきて下さるのですか」
「はい奥さま」
「この車で？」
「はい五時頃にお迎えにあがる予定ですが」
「車のことはよくわからないのですけど、これは外国の車ではないわね」
「はあ、国産車ですが」
「お正月にもこの車がきてくれたけど、それではこれが今でも主人の専用車なのですね」
「そうです」
「では一年前から換わっていないのね、主人の車は」
「換わっておりませんです」
きびしい表情で矢つぎ早に質問して来る女主人に運転手はおろおろと答えた。
車に片足をかけていた夫は、妻の質問の意図を察し、たまりかねたように妻に言った。
「いったい、この車がどうしたというのだね」
「半年前に送迎車は換わっていなければならないのでしょう。常務以上の役員に対する送迎車は外車というきまりが、確かあったのではなかったかしら」

「ある。だが、車のことなら私がこのままでいいから換えないで欲しいと言ったのだ」
「なぜ、そんなことをおっしゃいましたの」
「それは、この車で充分に用が足せるからだ、別に外国車である必要はない」
「そうでしょうか」
「そうだよ、だいたい、私は役員たちの送迎車の格づけなど廃止したいと思っている」
「それは私も賛成ですわ。ただ、現実にはまだちゃんとしたきまりがあるのでしょう。それならばちゃんとそのきまりを守るべきだ、と思いますわ。私の言うこと、間違っていますでしょうか」
夫は溜息をつくとなだめるような調子で妻に言った。
「それが、それほど大事なことかね」
「とにかく、私、今夜このような車では会場にはまいれません、私のところへはちゃんとして車をまわすようにおっしゃっていただきたいの」
夫人は冷やかに夫を見つめて言った。
「もし、あなたがおっしゃりにくいのでしたら、私から直接会社の方へ連絡してもよろしいのですけれど」
「君がわざわざそんなことで社に電話する必要はない。私から総務の者に言って来客用の車をこちらにまわさせよう。客用車はすべて外車だからたぶんお前も気にいるだろう」
「結構ですわ、そうして下さい」
田村洋之はうなずくと、いくぶんいらだったように車に乗り込み、運転手に、急いで車を出すように命じた。
二人の何気ないやりとりの内にある冷たさに気づいた運転手は、あわてて田村常務の指示にした

がった。田村常務は仕えやすい人間だったが夫人は苦手だった。
車はゆっくりと田村家の門前から離れ、小道をまがり、広い通りを都心に向かって、走る車の群に加わった。
やっと落ち着いた運転手は珍しく気むずかしげな表情の主人をバックミラーで見つめながら、
「先ほどの件ですが、奥さまのお迎えは私から配車を申請しておきます」
「そうしてくれたまえ」
「それから、この車ですが、何でしたら換えるように手配いたしましょうか」
「いや、そんな必要はない、私にはこの車で充分だ。先刻の話は忘れてくれ、いいね」
田村常務はきっぱりそう言い、運転手は仕方なくうなずいて運転をつづけた。

田村美紗子は夫の車が見えなくなってからも、なおしばらくそのままの姿勢で立っていた。彼女は田村家の立場を真面目に考えようとしない欲のない夫と、その夫の性格をよいことに、田村家の扱いに手をぬく大河内建設に対して腹を立てていた。
彼女の姓が田村でなく、もし大河内だったらはたして会社がこんな扱いをするだろうか、と考えるとますます彼女の怒りはつのった。夫に任さずに、自分で総務部長を呼びだして怒鳴りつけてやろうかと改めて思った。
家にもどってもこの腹立は一向におさまりそうもなかった。彼女はおどおどと自分についてもどった若い女中の時子に、この腹立をぶつけるように言った。
「すぐお風呂の準備をして、二階のバスよ、お湯は熱めにしてちょうだい、いいわね」
「はい奥さま」

あわてて階段を駈けあがって行く時子の背に向かって、美妙子は浴びせるように言った。
「そんなにバタバタ音をたてないで、静かに歩きなさい」
いったい何度言ったらわかるのだろう、とこの行儀作法の悪い女中をうんざりしたように見送った。お蔭で今朝は忘れていられた頭痛がはじまったようだった。彼女はこめかみを指で強く押しながら食堂へ入って行った。二十畳ほどある広い食堂には年配の女中の定子が、美紗子のための食事の仕度をしているところだった。
「すぐお食事、なさいますか」
「そうね、いただくわ」
彼女は大きなテーブルの中央に腰を下ろすと、きつい口調で訊ねた。
「秋子さんはどうしたの、まだ起きてこないの」
秋子は長男の嫁である。二、三日前から風邪気味だといって寝込んでいた。
「はい、まだおよろしくないようです。今朝、剛一郎さまがそうおっしゃっていらっしゃいましたから」
「仕方がないわね、本当に」
美紗子は定子が用意したティーポットから熱い紅茶を、わざわざフランスから取りよせた美しい花柄模様のあるティーカップに注ぐと、香りを楽しむようにたっぷり時間をかけて味わった。
〈もしかしたら、あの女、今夜のパーティに出ない気かしら〉
美紗子はちょっと不安になった。近ごろの嫁にしては秋子はしごく従順な女だった。これまで義母である美紗子に抗ったことは一度もない。そんな嫁が、なぜか今夜のパーティへの出席だけはよい返事をしなかった。

〈いったい、今夜のパーティを何だと思っているのだろう〉

美紗子はまた腹が立った。誰も彼もが、今夜のパーティがどのようなものか真剣に受けとめていないのだ。夫も——嫁も——。

もっとも嫁がパーティをきらう理由もわからないではない。嫁の秋子は幼少時に患った小児マヒのため、今でも微かではあるが片足をひきずるようにして歩く。だが和服さえうまく着こなせば、そんな肉体の欠陥を他人に気づかれることはまずない。

それに、かりに気づかれたとしても、だからどうだ、と美紗子は言いたかった。ふつうのパーティならばいざ知らず、今夜に限っては、そんなことぐらいがまんして出席するのが嫁の義務ではないか、と美紗子は思った。

今夜のパーティで、この田村家がどのような立場に立つかを考えたら、美紗子だけでなく今は田村の嫁になった秋子だって、無関心ではいられぬはずではないか。それなのに、と思うと、美紗子は舌打ちしたい気持になった。

五年前、創立四十周年のパーティで、田村美紗子は思い出してもにがにがしい屈辱を味わった。その年のパーティは、大河内建設が完工高で永年のライバル関係にあった大間建設を抜いて業界第四位にのし上がったこともあって、会場には建設大臣夫妻も列席したこれまでにない豪華な宴であった。

この晴れの会場で、美紗子は、パーティを取りしきる大河内建設婦人会の意図で、重役夫人たちの末席に坐らされたのであった。夫の洋之がまだ重役になったばかりだという一応の理屈はあったが、夫の身分はともかく、彼女は単なる重役夫人ではなく、社長のたった一人の娘というとくべつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com